

乗り物で行く「おくのほそ道」その1
深川から仙台まで

●旅立ち

松尾芭蕉は、知人の世話で隅田川を船で遡り、千住大橋で陸に上がって歩き始めた。

隅田川を走る水上バスは浅草より上流には走っていないので、可能な限り川の流に近いうちを走る都バスを使うことにした。

清澄白河駅から都バス<門 33>亀戸駅前行に乗る。10~20分間隔で走っているので、気軽に利用できる。清澄通りを北上して、厩橋東岸の本所一丁目下車。

交差点を北へ渡って<草 24>浅草寿町行に乗り換える。バスの旅は乗換えが厄介なのが欠点。大きな交差点で乗り換えるバスの停留所がわからないと大変なことになる。この路線は二時間に3本というダイヤなので、待ち時間は30~50分になる。事と次第によっては隅田川に架かる橋の景観を楽しみながら川沿いに歩いてしまう方が速いかもしれない。

<草 24>は駒形橋を左手に見やった後で吾妻橋を渡って、浅草雷門へ。雷門の一本西側の交差点にバス停がある。清澄白河駅を10時頃に出れば、そろそろ空腹を感じる頃なので、「国際的観光地浅草(?)」で昼食。「尻尾がはみ出す天井」が気に入ってよく通った尾張屋の天井は、今はどうなっているのか、気になる。

●千住から小山へ

浅草雷門から<草 43>千住車庫/足立区役所行に乗る。一時間に2本走っているので、昼食前に時刻表を確認しておけば待ち時間は少なくすることができる。バスは田原町を右折して六区を抜けて三ノ輪橋方面に向かう。三ノ輪橋・大関横丁を抜けて千住大橋を渡り千住に入ると、ようやく「おくのほそ道」のルートに合流する。

日光街道を走るバスを千住二丁目下車して交差点を東に歩くと、北千住駅まで5~6分。

北千住駅からは東武線を使って日光街道を北上する。

少しでも「おくのほそ道」を体感したければ、各駅停車に乗るのがいいし、気に入った駅で下車するのも悪くない。北千住駅から久喜駅まで、急行に乗ると40分ほどだが各駅停車だと1時間弱。

久喜駅で東武線を下りてJR宇都宮線に乗り換える。小山駅までは30分程度の旅。利根川を渡る鉄橋から右側の車窓に栗橋の渡しと関所があった所(今は利根川橋)が見える。

小山駅で下車する頃、冬ならば関東平野の日没が楽しめるかもしれない。まだ時間に余裕があれば栃木まで駒を進めてもいいが、ホテルや飲食店が多い小山で宿泊した方が便利かもしれない。<小山に一泊>

●小山から日光へ

小山から壬生あたりまでは鉄道もなくバス便も薄いところなので、できるだけ「おくのほそ道」に近い所を走ろうとするなら、両毛線と東武線を利用するしかない。

小山駅から出る両毛線は通学時間帯を外れると一時間に一本。栃木駅までは僅か10分程度だが、電車を待つ時間の方が遙かに長いので予め時刻表を確認しておいた方がいい。

思川を渡って穏やかな景色に見とれて乗り越さないようにしなければいけない。栃木駅で下りて再び東武線に乗り換える。ここで宇都宮線に乗って野州大塚まで行けば、芭蕉が立ち寄った室の八嶋(大神神社:おおみわじんじゃ)を拝むことができるし、思川と黒川に挟まれた平地を北上すれば「おくのほそ道」を辿ることになるのだが、このあたりには鉄道もバスも走っていない。

仕方がないので各駅停車東武日光行に乗り、例幣使街道に沿って日光を目指す。合戦場・家中・楡木・縦山と駅名をなぞるだけでも想像が広がる。芭蕉と曾良が書き記した地名を駅名や車窓の風景で感じ取ることができ、またそれが車窓を流れていくのは映画を見ているような面白さがある。

小山を朝ゆっくり出ても、東武日光に11時頃には着けるだろう。

日光観光を楽しむのには中途半端な時刻なので一泊することにした方がいいかもしれない。このプランでは観光をせずに先へ進むことにする。

●日光から黒羽へ

「おくのほそ道」では、日光観光を済ませた後で瀬尾・川室を通過して大渡で鬼怒川を東へ渡って矢板方面へ向かった。このルートは現在の地図で確認すると国道461号線で、昔は日光北街道と言われていて、大田原へつながっている。

現在は路線バスもなく、車がない人は通ることができないルートになってしまっている。しかたがないので、日光駅前では早めの昼食を済ませてJR日光線で宇都宮へ出て、東北本線で那須塩原駅へ向かうことにする。日光線も一時間に一本なので、時刻表を確認してから食事にする。

那須塩原駅から大田原を抜けて黒羽・雲巖寺へ行く市営バス雲巖寺線を使うことにするが、これも一日5本程度なので十分な下調べが必要。黒羽で一泊する必要があるかもしれない。

芭蕉一行は黒羽に着くと、余瀬(よぜ)という集落にいる俳句仲間の桃翠という人の家に滞在して、浄法寺・雲巖寺などを歩いている。

那珂川沿いのホテル花月に一泊というところだろうか。<黒羽に一泊>

●黒羽から那須へ

芭蕉一行は黒羽の余瀬を出るにあたり馬の世話になり、野間というところで馬を返して徒歩を開始した。

高久の角左衛門宅に数日滞在後、松子村を通過して那須に向かった。

松子村は現在の東北自動車道の那須ICの北側の那須街道沿いの集落。この道は黒磯から那珂川の左岸を那須に登っていく道。黒羽の那珂川の岸辺は海拔150mだが、松子村まで来ると海拔400m弱になる。

那須の旅のゴール殺生石は海拔900mの高さにある。容易ならざる行程だったことが想像できる。

黒羽のホテル花月の前から西那須野駅まで関東バスに乗ることができる。

西那須野駅から東北本線で黒磯駅まで二駅。黒磯駅西口からバスで那須湯本まで上って殺生石を見てくるか、温泉に一泊することにしてロープウェイで登山してくるのも悪くない。<那須温泉に一泊>

●那須から福島へ

曾良の記録によれば、那須から下ってきて漆塚を通過して芦野へ行ったことになっている。

漆塚は、東北本線の黒田原駅の西側を走る奥州街道沿いの集落で、一行が黒田原を目指して山から下りてきたことが解る。芦野は黒田原から南東へ走る県道大子那須線から入った所にある。芦野から伊王野周辺を見歩いたのちに東側の三蔵川の谷に入り、峠越えをして白河の関を目指したと思われる。

この道が往時のみちのくへの関所越えの道だったが、今は県道坂本白河線と名が付く、ややマイナーな道路になっており、バスは新白河駅から関所跡まで一日2本走っているだけである。

那須湯本から黒磯駅までバスで戻って来ることはできるが、芦野・伊王野を経て峠越えをして白河の関跡へ行く交通機関はないので、白河の関を越える旅を組み立てることは不可能。

黒磯から東北本線に乗って先へ進むことにするが、どうしても関所跡を見たいと思う人は新白河駅で下車すれば良い。しかし時刻表をよく調べて出向かないと戻って来られなくなる可能性があるので、要注意。

「おくのほそ道」は、白河の関を越えて白河城の横を抜けて阿武隈川を渡り、鹿島神社の前を通過して郡山方面へ向かった。須賀川では一週間ほど滞在して付近の名所旧跡の探訪を楽しんだ。

現代の旅では黒磯から、奥州街道と並走する東北本線の力を借りて福島まで行くことにする。車窓の景色をゆっくりと楽しんだ方が芭蕉の気分になるので、各駅停車に乗る方が良いだろう。とは言っても、現在の東北本線のダイヤでは、黒磯から郡山まで・郡山から福島までと小刻みに区切った各駅停車しか走っていないので思いの外時間がかかる。このゆっくりさを味わうのも旅の妙味と思うべきだろう。

鏡沼・安積沼・安達ヶ原の黒塚などに立ち寄った後福島に一泊した松尾芭蕉を真似て<福島に一泊>

●福島から白石へ

福島駅の東口から南へ少し歩くと荒川が阿武隈川に合流する信夫橋に出る。阿武隈川の左岸を進むと文知摺橋がある。この橋を渡ると、正面の山を背にして文知摺(もぢすり)観音(文字摺観音とも言う)がある。芭蕉がここを訪ねた時には文知摺橋はまだ架かっておらず岡部の渡しという渡船場があった。観音に詣でた後は北に向かって歩き、月輪の渡しで阿武隈川を左岸に渡り瀬ノ上に向かった。

福島駅から文知摺観音まではバスで10分程度なので、往復してみるのも一興ではあるが、やはり一時間に一

本程度のダイヤのようなので注意が必要。

「おくのほそ道」では文知摺観音から月輪の渡しを経て瀬ノ上を抜けて飯坂温泉の佐藤庄司の墓を訪れている。福島電鉄飯坂線の医王寺駅から北西へ10分ほど歩いたところにある。佐藤兄弟は奥州藤原の秀衡の家臣で、平家に追われて滅亡した藤原一族の悲話に登場する。秀衡の館跡を見ての感動が「おくのほそ道」に記されている。この日芭蕉一行は飯坂温泉に一泊している。

福島駅から飯坂線に乗ってローカル線の旅を試みるのも悪くない。

福島駅周辺の観光を軽く済ませて昼食後、東北本線に乗り仙台方面へ向かう。「おくのほそ道」はほぼ東北本線と並走しているので車窓の旅を楽しむことにする。

伊達・桑折(こおり)・藤田と進んで行く。藤田駅を出ると並走する東北自動車道と共に大きくS字型にカーブする。左手から張り出した阿津賀志山の先端に防塁が築かれて「伊達の大木戸」があった。反対側の右の車窓に大木戸という集落が見える。

貝田駅を過ぎると海拔 200mほどの小さな峠を越えて宮城県に入る。峠を越えたあとはゆっくりと下り、馬牛沼を抜けると燈摺坂(あぶみすりざか)がある。狭い峠道で馬同士がすれ違くと燈が触れるのでこの名が付いた。前述の奥州藤原の家臣佐藤忠信・継信兄弟の妻の甲冑姿の像が祀られており、坂上田村麻呂も祀っている。長い緩やかな峠道を下りきって白石まで来ると海拔 47mほどになる。

福島から白石への各駅停車は、県境の峠を越えて 34Kmの道のりを、こともなげに35分で通り抜ける。

●白石から仙台へ

白石を出た芭蕉一行は岩沼の竹駒神社に立ち寄った。

日本三大稲荷のひとつと言われている。岩沼駅から徒歩10数分なので、歩いて往復できる。

「おくのほそ道」には、このあと笠嶋へ行こうとしたが辿り着けず、遠くから眺めただけと書いてある。

平安時代の歌人である中将藤原実方の墓があることから笠嶋へ行きたかったのだが、悪路と疲れて諦めた。

実方は、宮中で藤原行成と口論になり、相手の冠を取って庭に投げつけたことが原因で陸奥守に左遷された。

この地の笠嶋大明神の前で下馬しなかったことから神の怒りを買って落馬・落命したと言われている。

後の世で西行がこの地を訪れていることから芭蕉も訪ねて見たかったようである。

悪路で難渋した様子が見えるような一句が書き記されている。

笠嶋はいずこさ月のぬかり道

笠嶋は、愛嶋(めでしま)丘陵の東端に位置し、名取の海に向かって突き出した所で、付近から古代の遺跡がいくつか発掘されている。JR名取駅から徒歩40分ほどの山中に「中将実方の墓」がある。

岩沼駅から東北本線に乗り、仙台へ向かう。<仙台に一泊>

以上